城下町岩槻鷹狩り行列とは

江戸時代、徳川家康公が鷹狩りをしながら何度も岩槻を訪れた史実を再現した、さいたま市区制施行１０周年記念事業として平成２５年から毎年 11 月 3 日（文化の日）に開催される岩槻区のイベントである。

行列とは

将軍、藩主、姫、若年寄、目付、鷹匠をはじめとする総勢１００名以上の集団が、それぞれの役柄の衣装に身を包み、日光御成道（旧国道 16 号）の市宿から久保宿までの約１ｋｍを鷹匠による放鷹術や槍や薙刀の演舞等のパフォーマンスを行いながら岩槻の街を練り歩くものである。

鷹とは

タカ目のうち、小・中形の一群の総称。大形のものはワシと言う。肉食の猛鳥で、くちばしは鋭く曲がり、脚に鍵爪（かぎづめ）がある。

鷹狩りとは

鷹匠が、飼いならした鷹を放って鳥やウサギなどを捕らえさせる狩猟である。

鷹匠（たかじょう）とは

江戸幕府の職名で、主君の鷹を飼い、鷹狩りに従事する者である。現代における鷹匠は、日本の伝統文化として受け継がれてきた鷹の飼育、訓練を行う専門家のことである。

放鷹術（ほうようじゅつ）とは

放鷹術とは、鷹狩りの技術（鷹を使って獲物を獲ること）のことであるが、鷹狩り行列では主に、鷹匠の腕と行列参加者や観客の腕とを行き来する「渡り」と呼ばれる技が披露される。
鷹匠から観客へ。鷹匠から木へ。ビルの最上階の鷹匠から地上の鷹匠へと様々なバリエーションの放鷹術を見ることができる。
１００人以上の観客が組んだ腕のアーチの下を鷹がくぐる技を、ぜひ体感していただきたい。

将軍とは

江戸幕府初代将軍　徳川家康公のことである。

行列の主役であるためセリフは多い。

藩主とは

岩槻藩主 高力忠房公のことである。鷹狩り行列では、岩槻城から城下に出て、将軍をお出迎えする場面を再現している。

お出迎えの際には「岩槻黒奴」の奴振りを将軍に披露する。

こちらも主役級であるためセリフが多い。

姫とは

将軍側２名と岩槻藩側に１名、姫役を設けている。実際には鷹狩りに姫を同行した史実はないが、イベントを盛り上げるために第一回目から登場している。
将軍側の姫にはセリフはないが、岩槻藩側の姫には「将軍に浄国寺の井戸水で入れたお茶を召し上がってもらう」という重要なシーンがあるためセリフが多い。

若年寄とは

江戸幕府の中でも老中に次ぐ重要な地位で、旗本、御家人に関する事務の一切を仕切る役職である。

行列の進行管理役である。

将軍からの命による、若年寄からの「出立（しゅったつ）！」の掛け声により行列はスタートする。

目付（めつけ）とは

旗本や御家人の監察にあたり、政（まつりごと）の一切の監察や城内の礼儀作法を正す重要な役職である。

鷹狩り行列では、藩主に将軍の到着を知らせる役どころである。

腰元（こしもと）とは

城内の奥向き全般のお世話をする役職である。

徒（かち）とは

将軍身辺の護衛役である。

側衆（そばしゅう）とは

将軍のお側に常に仕え、御用の取次などを行う、いわば秘書の役職である。

侍女（じじょ）とは

偉い方のお屋敷に仕える婦女子たちのことである。

将軍家に仕える侍女たちは時折、いざという時に備え、威勢良く薙刀（なぎなた）を持って鷹狩りに参加することもあったようである。

鷹狩り行列では薙刀の演舞を行っている。

道具持ちとは

槍持ち、長巻持ち、挟箱持ち、立傘持ち、大鳥毛持ち、台傘持ち、蓮台担ぎ等の道具持ちがいる。

行列を重厚に引き立てるための、いわば縁の下の力持ちの役柄として登場する。

小十人（こじゅうにん）とは

江戸幕府の警備、軍事部門を担う役職で、行列の前衛、目的地の先遣警備、場内の警備などを行っており、いわば現代の警察庁のようなものである。

鷹狩り行列では槍の演武を行っている。

やまぶき道灌太鼓とは

2009 年 1 月に発足した「やまぶき道灌太鼓」は、岩槻の歴史・伝統をモチーフに組太鼓や振り付を創作し「岩槻まつり」や「やまぶきまつり」など、年間を通して十数回、地域のイベントを盛り上げるために活動を行っている。

岩槻黒奴（いわつきくろやっこ）とは

江戸時代から日光の赤奴・甲府の白奴そして岩槻の黒奴が日本三奴とされていた。
岩槻の黒奴は久伊豆神社の神幸祭、神輿徒御の先に立ち岩槻城内、また城下を練り歩いていた。
昭和 29 年に一度途絶えた「岩槻黒奴振り」をさいたま商工会議所青年部有志 11 名が復活させ、平成 22 年に岩槻黒奴保存会を発足、平成 30 年 11 月に再興 10 周年を迎え現在に至る。

行列の参加者とは

参加者募集のチラシやポスター、ホームページ等から応募し、城下町岩槻を盛り上げるために集結したイベントの協力者達である。